

ニューズレター 第6号

大阪学院大学外国語学部

外国語学部は実績主義

—夢を実現した先輩に続いて下さい—

2012年3月30日発行

外国語学部の学びのポイント

外国語によるコミュニケーション能力(英語、独語、仏語を、読み、書き、聴き、話す力)を最大化することによって、学部生の 1) キャリア形成(教職を含む) 2) 留学 3) 大学院進学をサポートします。

優れた言語教育ができる教育者を 目指して大学院進学

横地 綾さん(英語学科 2012年3月卒業。4月より大阪教育大学大学院 英語教育専攻 英語学コースに進学予定)

中学校の教員になることが、中学生の頃からの夢でした。しかし、私は大阪学院大学を卒業後、大阪教育大学の大学院に進学する予定です。もちろん、夢を諦めた訳ではありません。しかし、教職課程で教員になるための多くの授業を受講しているうちに、私はこのまま教師になってもいいの



だろうかという気持ちがだんだん大きくなってきました。そのように考えていたところ、教職課程を履修し

た後、大学院へ進学したという先輩のお話を聞く機会がありました。その先輩も、私と同じような気持ちになり、進学を決意したとのことでした。その先輩のお話がきっかけとなり、私は少しずつ進学という進路について興味を持ち始めました。

大学院について考えだしたものの、全く知識の無い私はどうすればよいのか分からず、ただ大学の授業を受け、英語の勉強をするしかありませんでした。しかし、これでは大学院に進学できないと思い、先生方に相談したところ、多くのアドバイスを頂きました。まずは、自分の専攻研究分野を定め、どの大学の大学院を受験するのかを決めること、そして何よりも英語力を上げることが必要でした。

そして、私は自分の専攻を「生成文法」に、受験する大学院を「大阪教育大学」に決め、英語の勉強と生成文法の勉強を始めました。勉強は多くの先生方に協力していただきました。夏休みには週に2回大学で勉強会という形で個人的に指導をしていただきました。夏休みが明けて授業が始まってからも、授業の空き時間に個人指導と自主勉強をしました。1年半ほど英語と専攻分野の勉強を続け、4年生の夏になんとか大阪教育大学に合格することができました。普段はあまり緊張することのない私ですが、試験を受けたときと、合格発表のときはさすがに緊張したのを今でも覚えています。お世話になった先生方に合格の報告ができ、本当にうれしかったです。

大学では教職課程を受講していない学生に比べれば、より多くの授業を履修しなければならず、くじけそうなときもありました。勉強をしているときも、みんなと同じように就職活動をしたほうがラクなのではないかと思うときもありました。特に、就職に関しては、長引く不景気や大震災の影響もあり、新卒の就職率も低く、もし大学院に合格できなければ私の進路はどうなってしまうの

かという大きな不安がありました。しかし、ここまで頑張ってきたのは、一緒に教員を目指した神谷ゼミの仲間、家族、そして何より私のために多くの時間を割き、勉強をみてくださり、励ましてくださった川本先生、神谷先生、藤井先生といった多くの方々のおかげです。もし、この仲間がいなければ、もし、先輩のお話を聞く機会がなければ、もし、先生方に相談していなければ、どれが欠けても今の私はありません。本当に感謝しています。

私は、ただ教員免許状を取得することだけを目標に、大阪学院大学に入学しました。初めはそれを目指としただけの大学生活でしたが、自分の本当にしたいことは何か、そのためには何が必要なのか、それを考えるきっかけを与えてくれたのが大阪学院大学です。そして、進学という道を選びました。しかし、この道は私のゴールではありません。卒業後、もっと成長し、中学校の教師になることが私の夢なのです。

将来、やりたいことがある人は、今以上にその夢を実現させる努力をしてください。やりたいことが無い人は何でもいいので、何か1つ夢中になれることを見つけてください。そこから何か見つかるかもしれません。夢は見るものでも、語るものでもない、叶えるものだという歌が昔ありましたが、そのとおりで、夢は自分次第で叶えられるものだと思います。そして、大阪学院大学には、その環境があります。これから、夢に向かう皆さん!!一緒に夢を叶えましょう!!



(ヨコチ アヤ)

オランダ留学から貿易・物流業界へ

藤間 浩之さん（英語学科 2012年3月卒業。在学中 HZ 応用科学大学（オランダ）に1年間留学。4月より NEC ロジスティクス株式会社に入社予定）



私は、大学入学以前からある目標、いわゆる大学卒業後のビジョンを持っていました。それは、「大学生活での4年間で国際感覚を養い、将来的に海外で働きたい。」というものでした。大学入学当初、まずその目標達成のためには、留学でしっかり語学を身につけたいと考えるようになりました。その後、留学に行くためには規定の英語のスコアが必要であると知り、授業後は毎日図書館での独学はもちろん、学部外部の授業も受講し、ひたすら勉強に励みました。その結果、1年次の最後には基準のスコアを獲得することができ留学の切符を得ることができました。

留学と言えば、大抵アメリカやオーストラリアといった英語圏が挙げられるのですが、私は留学先としてヨーロッパのオランダにある HZ 応用科学大学という学校を選びました。それには、3つの理由があります。まず1つ目に、留学を通して、語学を学ぶのではなく英語で何かを学びたいと思い始め、多くの国々から多様な人種の人々が集まるヨーロッパでビジネスを学びたいと思ったからです。2つ目に、この大学には世界各国から500名に及ぶ留学生が在籍していることから、様々な異文化交流ができると思ったからです。3つ目に、

その500名の留学生のなかで、日本人は自分1人だけだったということです。

留学に行ってから生活は大変なものでした。日本人がいない環境で英語だけの生活を送ることはもちろん、英語でビジネスを学ぶということ、また、慣れない西洋の授業形式に馴染まなければならぬことなど、日本での“普通”との違いについていくので精一杯でした。特に、授業の形式の違いには苦労しました。大抵、日本の大学の授業では、先生が教室の前に立ちひたすらレクチャーをし、学生はそれをただただノートに取るというもので、試験も各自でやるレポートや筆記試験が主です。しかし、西洋では、授業中、先生のレクチャーだけではなく学生が常に自分の考えや質問を発信し、学生が授業の中心となるのが普通でした。また、各授業で約5人1組のグループを作り、そのグループで、マーケティングの授業であれば、それについてディスカッションやプレゼンテーション、また皆で多量の英文のレポートを作成したりなど、常に主体性や自己表現を求められる環境でした。

しかし、毎日努力する中で、そういった“違い”にも日に日に慣れていき、多くの友人をつくることができました。それとともに余暇には多くの貴重な経験をすることができました。例えば、オランダ人のフットサルチームに加わり、学校のフットサルリーグに参加したり、年末年始には学校で



知り合ったフランスのパリ出身の友人の実家にホームステイをしたり、また様々なヨーロッパの国々を旅行するなどし、多種多様な文化や習慣、価値観などを、様々な国籍の人々との交流を通して感じることができました。そし

て、そういった環境のなかで日本を客観的に見ることができました。

そのなかで気付いたことが2つあります。1つ目は、日本語が喋ることができれば生活に支障のない島国である日本に比べ、多くの国々が隣接するヨーロッパでは生活やビジネスをするなかで、多種多様な文化や人種が常に混じり合うことが普通であるということを知り、日本がいかにグローバル化から取り残されつつあるのかということに気づかされました。2つ目に、海外の市場では、日本の企業や製品が他国の企業に圧倒され、残念ながら日本製品が重宝される時代ではもはやないということも実感させられました。この留学での1年間を通じ、日本にいては決して得ることができない貴重な経験をすることができました。

このような刺激的な1年間の留學生活を終え、次に私を待っていたのは、就職活動でした。当時、私は就職活動をするにあたって3つの軸を持って



いました。1つ目に、「1年間の留学経験を活かせる会社」です。2つ目に、「世界中に多くの拠点を有している会社」です。3つ目に、「貿易業界に携わっている会社」です。その結果、NECグループ傘下のNECロジスティクスという貿易・物流業界では大手と言われる企業から内定をいただくことができました。この企業は世界で躍進している会社ということもあり、これから自分自身の努力次第では海外での活躍の機会をいただける可能性があります。卒業後は、新たな社会人としてのスタートラインが待っています。これから、きっと留学当初に直面した以上に高い壁にぶつかると思います。しかし、今まで以上に努力を欠かさず自身の目標に向かって精進していきたいと思っています。

(トウマ ヒロユキ)

理想の教師像を求めて留学

太田 智美さん（2012年3月英語学科卒業。在学中メリーウッド大学（アメリカ）に留学。4月より大阪学院大学高等学校で非常勤講師として勤務予定）

私は2012年の春から、大阪学院大学の併設高校で英語の非常勤講師として働くことが決まっています。非常勤講師なので、授業以外で生徒とコミュニケーションを取る機会は少ないですが、高校生と一緒に学び成長できることを楽しみにしています。

私は大学生生活4年間で新しい自分に出会うことができました。そのきっかけは、教職課程と半年間の留学生活です。入学後、将来のために何かしようと思い、軽い気持ちで教職課程を履修し始めました。当時の私は、人前で話すことが大の苦手だったため、「自分なんか教師は無理だ…」と思っていました。履修を進めていく中で、外国語教育の現状を学び、また教える事への楽しさを感じるようになりました。それと同時に、理想の教師像や授業方法も考え始めるようになりました。私が理想としていた授業は、まさに大阪学院大学で受講したネイティブの先生によるオーラルコミュニケーションのような授業です。グループワークを中心に、英語という言語だけではなく、英語圏の文化などを取り入れた学生と学生が繋がる事の出来る授業がしたいと思っていました。そこで私は、ネイティブの先生方が行っている教授法に興味を持ち、自分自身でそれを体験したいと思いアメリカへの留学を決めました。

そして3年次の夏から4ヶ月間、アメリカ・ペンシルヴァニア州にあるメリーウッド大学へ留学

しました。もちろん慣れない土地での生活と言葉が上手く通じないという事で、何度も逃げ出したい気持ちになりました。そこで私は、留学の最大の目的を見失わないように1冊のノートを作る事にし、そこにその日に行われた授業の内容を書き留めました。現地では、リーディングやライティ



ング等の英語の基礎を学ぶものと、ワークショップ型のものの2種類

の授業があり、ただ英文を書くだけ、リスニングをするだけではなく、常に工夫加えられていて、楽しくゲーム感覚で学べるものばかりでした。またアジアを中心に世界各地から来ているクラスメイトから、その国の学校や授業の雰囲気、休日の過ごし方など貴重な話を聞く事ができ、その全てをノートに書き留めました。

この頃から私は教員になりたいという気持ちを強く持ち始めていましたが、その一方で、教員になるためには、人前で話す事に対する苦手意識を克服しなければならないとも思っていました。最初は、英語という事もあり自信がなかったのですが、チャンスを無駄には出来ないと思い、授業では積極的に発表し、カフェやスーパーマーケットで出逢う人に話しかけてみたりしました。すると帰国前には、人前で話す事も緊張しなくなり、勇気を出してよかったと思っています。半年という短い留学期間でしたが、私にとっては自分を成長させる事の出来たとても充実した期間だったと思っています。

帰国後は就職活動を少し行いましたが、本当に自分がやりたい事は何かを考えるとともに、留学中に作成したあのノート等を見ることで、やはり教員になりたいという気持ちを再認識し、結局教

員を目指す事にしました。さらに4年次生になり教育実習に参加し、ますますその気持ちが強くなりました。最初は軽い気持ちで始め、私など教師にはなれやしないと思っていたので、本当に教師になると決まった時は、自分の事なのにすごく驚きました。そして人は何か目的があれば変われるという事を実感しました。そして、そんな私をいつもサポートしてくれた周囲の方々には本当に感謝をしています。これから、楽しい事よりも苦勞する事の方が多いと思います。それでも、そこで挫けず、私らしく楽しみながら社会人1年目を迎えたいと思っています。

最後に、大学生活をいかに有意義に過ごすかどうかは、皆さん次第で変わりま



す。やりたい事があれば、失敗を恐れず挑戦してみてください。もちろん成功よりも失敗する事の方が多く、後悔する事も多いと思います。しかし、そこで新しい自分にも出会え、きっとそこから何かが始まると思います。少なくとも私はそうでした。今しかできない自分らしい欲張った大学生活を過ごしてください。(オオタ トモミ)

行動力でチャンスをつかみ、 縁を繋ぐ仕事に

手向 健太さん(2012年3月英語学科卒業。4月よりエン・ジャパン株式会社に勤務予定)

この大学4年間を振り返ってみますと、私は特

に熱心に勉強したというわけではなく、どちらかというと友人との絆や友達との遊びを大切にしてきました。したがって、外国語学部で特に優秀だったわけでもなく、周りの人と比べて学力が最も優れていたのかと言われると、そうでもありません。しかし、すると決めたことは、粉骨砕身とことん取り組み、その全てを必ず成し遂げる、そんなメリハリある学生だったと思います。



私は教員免許を取得するため教職課程の授業も履修していました。そこで目の当たりにしたことは、履修しなければならない授業数と課題の多さ、更に頻繁に課せられる模擬授業の多さでした。しなければならないことが多数重なることで、睡眠時間が異常に少ない時期もありましたが、それらの壁に真正面からぶつかり、心が折れそうな仲間に対して声をかけるなどして、全ての単位を一切落とさずこなしていきました。

そんな私を見て、ゼミの先生に3回生からゼミ長に推薦していただき、多くのことを任せていただきました。ゼミ長として学生をまとめなければならないこととして、もちろん授業関係のことが多くありましたが、その中でもゼミ合宿を企画したことが一番の思い出です。BBQやスポーツ大会を開催し、ゼミのメンバーの仲がより一層深まったと同時に、普段話さないことを真剣に話すなど、非常に有意義な時間を作ることができました。また、私はゼミ以外でも、外国語学部08年度生の様々な飲み会の幹事を何回もさせていただきました。友達からしばしば「幹事大変やろ?」と言われることがありましたが、そのたびに私の決まり文句は「みんなが笑ってくれたらそれでいいねん!」でした。

そんな私は、4月からエン・ジャパン株式会社

に就職します。この会社は、人と企業の縁を繋げる会社です。エン・ジャパンは関東では知名度が高いですが、関西ではまだ知名度がそれほど高いという訳ではありません。とは言え、後輩の皆さんが就職活動する際、エン・ジャパンの就職サイトもきっと利用することとなると思います。

私は自身が就職活動において据えた3つの軸とエン・ジャパンの事業方向や環境が合致したため、入社を決意しました。その就職活動における3つの軸とは、成果主義であること、意見をしっかり聞いてくれる環境があること。そして、ある程度の規模であることです。私は頑張ったら頑張った分、自分自身に返ってくる環境の下で働きたいと思っていました。そういう環境に身を投じれば、成長スピードも速いと考えているからです。次に、新入社員が、役員の方や先輩の方たちに対して意見を持ちかけることができる環境があるかどうかです。学生時代、飲食店でアルバイトをしていた際に、私たちアルバイトの声が本部に届かず、「現場知らんくせにいらんことしてくるな」という悔しい思いを何回もしました。そして、第3番目に、夢を叶えるためには、ある程度の規模が必要であり、それなりに大きな力とそれなりに挑戦するフィールドが必要だと強く思っています。これら3つの軸は一切揺らぐことなく、就職活動に励みました。そして5月初旬、エン・ジャパン株式会社から内定を頂くことができました。

就職活動において、みなさんには縁を大切にすることを心がけて欲しいと思っています。そして、自ら縁を切らないように日々を送って欲しいと思います。チャンスはそこら中に転がっているもの。しかし、そのチャンスを掴める回数は、「行動力」によって違ってくると私は考えています。「このくらい良いか」や「次は絶対にするから今回は…」と行動を起こさず、自らその縁を切ってしまうのは、非常にもったいないと思います。今までの大

学生生活で学んだことを全て発揮し、無理だというボーダーラインを勝手に引かず、がむしゃらに行動し、頑張ってください。

ところで、この「ニューズレター」の記事を書いている現在、思ったことがあります。それは、卒業まであと10日もない今の立場に立って、1年次の入学式まで振り返ってみますと、「私は何事にも恵まれていた」と実感します。大阪学院大学は、手向健太という人間を受け入れてくれて、一緒に笑い、厳しい状況のときにはみんなで支え合う先生や友人に出会う場を与えてくれました。そういった環境があったからこそ、私は辛い時期でも自ら立ち向かうことができ、大きな壁でも乗り越えることができたのだと思います。例を挙げればキリがないですが、大阪学院大学の先生方や友達、



そして私を取り巻く全ての環境に出会えて本当に良かったと心から思います。これからもそんな大阪学院大学であることを願っています

(テムカイ ケンタ)

夢を追いかける日々

岡田 宏太朗さん (2008年英語学科卒業。在学中のヴェクショー大学 (スウェーデン) に1年間留学。現在イケア・ジャパン株式会社 (IKEA JAPAN) 契約社員)

私は高校在学中から、いつか海外の大学で勉強してみたいと漠然と考えていました。外国語学部

系に進学して在学中に留学したいという思いを胸に大阪学院大学に入学しました。1年次と2年次の夏に、それぞれオーストラリアとアメリカでの短期語学研修にも参加しました。その後1年間の交換留学に応募しましたが、TOEFLのスコアが足らず、留学を断念せざるを得ませんでした。しかし、その後、2次募集があり時、その際、交換留学応募の際の英語熟達度の指標としてTOEFLだけでなくTOEICのスコアも採用されるようになり、私のTOEICのスコアでもなんとか留学することが出来るようになりました。ただ問題は、2次募集であったため、留学先の選択肢がハワイかスウェーデンの二択だったのです。

当時私はスウェーデンに関して「首都がストックホルムだ」という程度の知識しか持っていませんでした。しかし、全く知らない土地で様々なことに挑戦してみようと考え、スウェーデンのヴェクショー大学に1年間留学することを決めました。ヴェクショー大学は年間500名以上もの留学生を迎える大学で、英語での授業のカリキュラムも充実していました。その為、新しくスウェーデン語の勉強をする必要はありませんでしたが（実際、まわりにはスウェーデン語が全く解らないという留学生がたくさんいました）、スウェーデンに来たからにはスウェーデン語を勉強しようと思い、はじめの半年間はみっちりスウェーデン語のみを勉強しました。使用可能な言語が増えるというのは単純にコミュニケーションを取れる人の数が増えるというのがありますが、自分の知っている言語に翻訳されていないソースから情報を得ることもできるというメリットもあります。英語だけでなく、スウェーデン語ももっと勉強したいという意欲が湧いてきました。

この交換留学がきっかけで、大学卒業後に神戸にあるIKEAでシステムキッチンの契約社員として働き始めました。IKEAは北欧家具販売などを

中心とする企業で本社がスウェーデンなので、日本にいながらスウェーデンを身近に感じることができる企業です。実は、進路の方向を決めたときには、既にIKEAの新卒正式採用枠の募集は締め切りが終わり、パートタイムの募集のみが残っていました。また、働き始めてすぐ、大阪学院大学の職員募集のお話も頂きましたが、日本語も英語も両方使って仕事ができる環境に憧れていたこと



もあり、この時パートタイムとしてでもIKEAで働くことと決めることができて良かったと思います。現在も社員登用に向けて日々努力しています。そしてこのIKEAでの仕事を誇りと生

きがいを感じています。そのおかげか、神戸店の同僚（社内ではコーワーカーという名前呼びます）の中で、キッチン製品に関する知識をいちばん持った業員として自他共に認めてもらえるようにまでなりました。さらに今年IKEAが新店舗を福岡に開店することに伴い、新店舗開店の戦力として福岡に異動になりました。考えてみると、留学先の選択の際、ハワイかスウェーデンの二択がありましたが、スウェーデンを選ばなければ、間違いなく今の仕事をする事はなかったでしょう。

これから長期留学を考えている皆さんには、とにかく留学出発前に語学力をできる限りレベルアップする努力をすることをお勧めします。留学さえすれば語学の力がつくものと安易に考えている人もいるかもしれませんが、長期留学は語学を身につける為だけのものではありません。例えば私の場合、大阪学院大学の授業で英語を勉強し、留学先ではその英語を使ってスウェーデン語の授業を受講しました。その中で確かに英語力も伸びましたが、目的は英語ではなくスウェーデン語を学ぶところにありました。

もうひとつ在学生の人たちに指摘しておきたいことは、留学したから語学の勉強はそこで終わり、また大学を卒業したから勉強は終わりではないということです。社会に出てから学ぶことも数多くあり、それが当然、仕事に役立っています。

将来は、さらに英語やスウェーデン語がもっと高レベルの形で必要になる場面もあるかもしれません。社会に出ればまたそこで勉強が必要であり、そこで学んだことがダイレクトに仕事に役立つことは事実です。そう考えると、人生というのは学生時代だけでなく、その後もずっと勉強は続くものなのです。日々勉強です。

(オカダ コウタロウ)

三十路男の波乱万丈な社会人ライフ

山口 正一朗さん（2005年英語学科卒業。在学中セントラル・アーカンソー大学（アメリカ）に1年間私費留学。現在 コバヤシ産業株式会社 営業部勤務）

私は今年で社会人生活7年目を迎えております。大阪市天王寺区にある「コバヤシ産業株式会社」という商社でゴルフバッグのOEM営業の仕事をしております。ゴルフショップで売られているようなゴルフバッグやボストンバッグを大手スポーツメーカー（adidas、ミズノ、SRIXON等）の代わりに企画、デザイン、生産、流通まで行っている会社です。

生産拠点はベトナムと中国で、100%出資の自社工場や契約している工場があり、年に数回は現地に出張します。毎日嫌と言うほどの数のゴルフバッグに囲まれながら仕事をしています。私の担当は主に対工場への開発業務です。アジア各国のお客様から来る情報をまとめ、工場へ流すという業務を行って

ます。工場スタッフは日本語を話せますが、意思の疎通が上手くいかない事も多々あります。その為いかに分かりやすく説明するかが鍵となっています。もちろん現地の人々の性格も知る必要があります。



この様な会社で働く私ですが実はまだ入社して1年です。ピッカピカな新米です。ここに至るまでに業種も全く異なる2社を経験し、途中、旅人にもなりました。3社目ではありますが、こんなに全く無関係な業界で働くとは… 学生時代は予想もしていませんでした。

2000年に大阪学院大学に入学した私は、勉強はボチボチ頑張りながら陸上部に所属していました。高橋尚子先輩に憧れて… 少数派の短距離チームで毎日練習に明け暮れていました。そんな中、1年次の冬に怪我をした事がきっかけで陸上競技に対する熱が冷めかけていた時に、知人の紹介でアメリカに留学出来るチャンスが来ました。1年間休学しアメリカ南部アーカンソー州のUniversity of Central Arkansasへ個人留学をしました。日本人の少ない町での生活は今でも掛け替えのない思い出、財産になっています（编者注：この頃、まだ認定留学制度はありませんでした）。

帰国後、復学と共に陸上部へも復帰。留学前と変わらない普通の学生生活が戻りました。毎日部活へ行き、アルバイトに明け暮れ、引退後は授業の無い日はひたすらバイトバイトバイト…。お金を貯めては旅行へ行ったり、飲みに行ったりと、留学後の自信や情熱も、少しずつ薄らいでいました。そして就活。ここでも海外志向は以前ほどは無く、語学とは全く関係の無い建設業界に就職をし、毎日建設現

場へ外回り営業をしていました。後々この会社での3年間の営業経験は自分にとって大きな糧となりますが、夏は汗だく、冬は鼻水を垂らしながらヘルメットにスーツ姿の典型的なサラリーマンでした。

そんな社会人になってから、学生時代には考えなかった自分の将来について考えるようになってきました。就職してからというもの、毎日汗まみれになって走り回り、怒られ、謝り、残業を繰り返して、休みの日は疲れて外に出たくない… そういう生活になればなる程、学生時代に経験した留学、そこでの友人達や先生、色々な思い出が蘇りました。「本当に自分がやりたい事は何なんだ?」「1度きりの人生、このままで良いのか?」など、人生について真剣に考えました。そして退職。



退職後、まだ方向性が定まっていなかった為に夢であったバックパッカー、自分探しの旅を決行！アメリカ行きのチケットを買い、大陸横断鉄道 Amtrak に乗り、アメリカ大陸を横断・縦断。主要な

都市は全て行きました。ユースホステルに泊まり、色々な国々の人達と交流しました。今でもそこで知り合った人々とは交流があります。2ヵ月程アメリカをウロウロしていましたが、やはり経済面で不安になり帰国。アメリカ旅のおかげで忘れていた英語力も自信を取り戻し、海外営業の仕事を探しました。何社も落ちました。やはり自分には英語を使う仕事は難しいのかと諦めかけていた時に、スポーツ用自転車タイヤを製造する大阪の Panaracer という企業への採用が決まりました。しかも憧れの海外営業ではないですか！間もなく入社し私は海外営業マンとして再スタートを切りました。

いざ入社して働き出すと、これまで想像していた華やかなイメージとは異なり、地味で淡々とした内

勤営業でした。確かに海外営業と言っても毎日海外に行くわけにも行きません。基本的にはメールでのやり取りとなり、顧客は日本の商社になりますので日本語でのやり取りが殆どです。年に3~4回は海外で展示会があり、自社ブースでの商品展示や来場者への説明を行う際に英語は使用しました。海外顧客との直商談はもちろん英語で進行します。そこで私は自身の未熟さに愕然とする事になりました。英語が全く口から出てこないのです。頭では考えていても、完全に相手ペースに飲まれてしまい、一方通行的な商談のまま終了してしまうのでした。日常会話でいくら問題無いと思っても、ビジネスではそうはいかないという事。想像以上の語学力が必要となる事を痛感しました。何度もへこみました。何度も自信を無くし、英語を見る事すら嫌になる事もありました。これが海外営業職の現実であり、英語学科卒業&アメリカ留学経験者としてのプライドはズタズタに崩れて行きました。しかし、自身の趣味でもある自転車に関わる事が出来、業界の良い人達に恵まれて、なんとかモチベーションを保ちながら日々の仕事をこなす事が出来ていました。2年間この企業でお世話になりましたが、社内的な事情で退職する事になりました。社会に出ると様々な人と接する機会が出て来ます。時には気の合わない人と共に働き、理不尽な事に対する責任も負わなくてはいけない事もあります。それが社会というものです。決して仕事が嫌になったのではなく、出来る事ならば一生この企業で頑張りたいと思っていました。しかし、どうする事も出来ない事情で退職という手段を取ったのです。

その後、死に物狂いで転職活動をしました。状況は以前にも増して悪くなります。2度目の転職なのでから、企業としても「私」に対する見方が厳しくなります。一層の自己PRが必要となりますし、自分の経験をどの様に活かしたいのかを明確にしなくてははいけません。恐らく学生時代の就活や1回目の

転職活動の時以上の数の採用試験を受けました。色々な業界を受け、面接でダメだしをされる時もありましたが、コバヤシ産業株式会社に採用して頂く事が出来ました。

海外顧客担当の為に今まで以上に日常業務で英語を使用します。基本的にはメールでのやり取りですが、製品についての説明や輸送方法、価格交渉等々の殆どが英語で行われております。採用される際に英語力を試されましたが、簡単な作文に翻訳程度で、

あとは入社してからの実践で磨こうという事でした。この1年間、正直に言えば「大変な1年間」でした。何



も分からないまま入社し、製品知識もままならない状態で英語でのやり取り。日本語でもよく分かっていないのに、上手く出来るはずがありませんでした。しかし顧客から見れば私は会社の一員にすぎず、「分からない」では済みません。毎日が勉強です。分からない事は聞く。中途半端な対応はしない。少しでも多くの情報を得て興味を持つ事。社内コミュニケーションをたくさん取る事。働く上で基本的な事ですが、新卒で社会人になった時のように原点に戻り何事も貪欲に取り組んでいく事をモットーにしております。

学生時代に英語を専攻し留学も経験した私は、多少英語は出来るかもしれませんが「何の為に使い、活かしたいのか」という事を明確にする事が大切だと今感じています。学生時代の私にはそれが欠けていました。ただ英語が上手になりたいだけでした。社会人になって英語を使う仕事を探す際に初めて、自分のその考えが「甘かった」事に気づきました。昨今、語学の出来る人は山のようにいます。出来る人が多い為に、英語を話せる＝即戦力と思われま

す。周りからの期待度は大きく、プレッシャーを受ける事になります。学生の皆さんには、将来の自分を沢山イメージして欲しいです。そして、輝かしい未来に向かって、多少回り道をしてでも突っ走って欲しいと思っております。

(ヤマグチ ショウイチロウ)

編集後記

昨年10月米国アップル社の共同設立者の一人であるスティーブ・ジョブズ氏が亡くなった。彼の死は、実業界だけでなく世界中の老若男女、多くの人々に大きな衝撃と悲しみを与えた。友人とともにたった2人で車庫から始めたアップルのビジネスを、世界最大の企業にまで押し上げた成功物語は有名である。しかし、ジョブズが人々を惹きつけるのはその成功故ではない。複雑な出生の事情、大学中退、自己が設立したアップル社からの解任、アップル社の凋落、アップル社復帰後の立て直し、癌との闘い…というように次から次へと起こる危機と挫折に、屈することなく這い上がってきた。しかも、挫折のたびに傷つき弱音を吐きながらも復活し、より大きく成長していく人間らしい姿に私たちは共感する。

社会で働く卒業生諸君に次のジョブズ氏のことばを贈りたい。彼がアップル社の取締役会からクビを宣告された直後の話である。「私は30歳にして失職した。しかも公然と。私はこれまでの人生の中心だったものを失い、大きな衝撃を受けた。(中略)私は世間に周知された落伍者となり、シリコンバレーから逃げることも考えた。しかし、何かが徐々に私の中で湧き上がってきた。自分がしてきたことが、まだたまたま好きだった。アップル社での今回の出来事が私を怯ます事は微塵もなかった。私はアップル社から拒絶されたが、まだたまたま好きだった。そして私はやり直すことを決意した。」 (YK)

ニューズレター 第6号

発行 2012年3月30日

発行者 大阪学院大学外国語学部

発行者住所 〒564-8511 大阪府吹田市岸部南二丁目36-1

(電話) 06(6381)8434

(学部 URL) http://www.osaka-gu.ac.jp/dhp/gaikokugo_gakubu/